

## 変わるフィレンツェと人口減少のパラドックス

森記念財団研究員  
脇本敬治

フィレンツェの滞在は短かったが、4年前に比べ変わっていた点がいくつかあった。

まずは、中心部の歴史地区、ドゥオーモ周辺の一部は自動車の通行が許され、バス停もあったのだが余所に移され、完全な歩行者空間となっていた。ドゥオーモの周りは観光客向けのカフェやレストランが増えたが、バスの通行ルート変更に伴い、人の流れが変わったためか、地元の人々が利用していた昔からの小さな商店が少なくなったという。

バスといえば、旅行者にとってはルートや乗り方がわかりにくい、バス停に都バスのような到着時間の目安表示がなされるようになったこと、車内に停留所名が表示され、アナウンスが流れるようになったことも驚いた。バスの運転手に行き先を伝え、停留所に着いたら教えてもらわなくても、場所が分かるようになったのはありがたい。

フィレンツェには地下鉄がないので住民の足はもっぱらバスである。路線にもよるが、朝は5時過ぎから走り始め、夜12時過ぎまで。本数も多く、地下鉄大江戸線の感覚に近い。値段も1.2ユーロで90分間乗り降り自由なので、旅行者が使いこなせば行動範囲が一気に広がる。また、中心部のサンタ・マリア・ノヴェッラ駅から路面電車が2010年に復活していた。ただし、今のところ1路線だけである。



路線バスが移され歩行者空間となったドゥオーモ周辺

上：ドゥオーモ周辺で増えたカフェ

下：近くのシニョーリア広場も歩行者空間

今回最も驚いたのは、大型スーパーの省力化である。ヨーロッパでは大型店舗の規制が厳しいという話を聞くが、フィレンツェの中心部を少し外れると、coop やエッセルンガなど駐車場を備えた大型スーパーがある。そこでは自分で端末を操作して買い物の会計までやってしまうシステムが導入されている。入口で会員登録しておいたカードを端末に装着し、商品のバーコードを読み取れば、長いレジの列に並ばなくて済む。合計額も端末で一目瞭然である。もちろん普通のレジもあるが、多くの人が端末を使っている。これに太刀打ちできる街中の小売店は非常に厳しいだろうと思われる。スーパー側でも、人員を節約できる。便利さとその一方で、失われる職の数が気になった。

今回もう一つ驚いたことは、フィレンツェの人口の推移だった。ご存知のようにフィレンツェはルネサンスの都として芸術・文化を誇る観光都市であるが、現在の人口は約 36 万人。首都のローマ 275 万人、ミラノの 131 万人に比べると遥かに少ない。日本では長野市、和歌山市、奈良市などとほぼ同じである。知名度が高いだけに人口の少なさは意外に思われるかもしれない。しかも人口規模は 1980 年代には 45 万人だったので、当時に比べ現在は約 20%も減少している。

ちなみにフィレンツェ歴史地区が世界遺産に登録されたのが 1982 年、近年はロシアや中国からも多くの観光客が訪れていると聞く。フィレンツェ市の数字を見ると 2011 年は、前年に比べ外国人観光客は 8.6%、イタリア人観光客は 2.2%増加し、観光客数は初めて 800 万人を越え史上最高だったと発表されている。もう少し詳しく調べないと分からないが、どうも観光と人口増加は結びついていないようだ。

観光はフィレンツェの重要な産業であり、歩行者空間を広げたり、エピファニアの行進を始めたりと多くの努力がなされている。また観光は省力化とは縁遠く、多くの雇用を生み出すものというイメージがあるので、人口の減少は一種のパラドックスである。日本でもやっと観光に目が向けられ、取り組みが始まったばかりで、森記念財団でも東京が力を入れるべき分野として観光を提言しただけに、気になるところである。



coop 入口に並ぶ会計端末



coop の入るショッピングモール